

勝林寺寺報



いのち輝いて

「数えてみたらほんにはや十年にもなっています。」

わずか三年たらずの看病で死なせてしまった。そんなことでマア突然に別れてしまったら、あとは何ともいへん空虚なもので、今だに寂しくて寂しくて、いまでもどうにもなりません。

たったわずか三十年そこそこの連れ合いでしたが、別れということとはこんなに空しいはかないものでしょうか。

年がいもなくわたしがそのように本音を出したら、隣に座っていた八十に近いおじいさんが云いました。
ほんになー、
連れ合いに死なれるということは、なんともいえん寂しい事よ。

第一、なんというても不便で、いまの季節、何を着たらいいのか。また、どこにどう片付けたらいいのか。日々うろろ戸惑っている始末。
それはそうだけど、いや、そうであるほど、わしは今でもあの人と出会えております。お陰でお念仏さんいただいて、お念仏申すなかで、いつでもどこでもその人と出会えて話すことができるのは、わたしの今の幸せです。

へー。毎日出会えるのですか。
わたしがそう感じしていると、も一つ隣の席で、これは唄のとて上手な今年七十歳のお元氣な男性。

待てよ。そーだったのか!
なるほどそこが本当のいのちの生き場なんやな!

この今生きてるいのち。わしのこのいのちもいつ果てるやわからへん。
そういういのちではない無量寿ないのちにうまれよ、たら。死んでも死なんいのちに生きかえたら。生き死になんてどういう事もない。なるほど、そういう事やったんか。

わしは今癌を病んでいて、どんな死に方するかわからんが、どんな死にざまするかそんな事は、そうや、どうでもいいことや。のたれ死んでも、狂い死にしても、それがそのまま無量寿、おおきないのち、お呼び声のなか

わしはそのお呼び声のなかで堂々と死んで見せたるワ。

平成十四年五月なかば。そのひとは、輝く人生の幕をとじました。堂々と輝かしく亡くなっていききました。
南無阿弥陀仏。帰命無量寿如来。
はてしない大きな大きなのちに搦め捕られて、今、わたしたちに南無阿弥陀仏と語りかけ呼びかけていて下さいます。
(秋の酒場での一場面)



なつかしい『恩徳讃』

わたしの生まれは京都のまち内のどまんなか。しかし戦前はなんとなくのんびりしていて、みやこ情緒もありまして、どこからかコッポリの音が聞こえてくるそんな夕暮れ時ございました。

近所のお寺さんの日曜学校に、わたしは中学おえるまで通わせてもらって、そこでいろいろなお話し聞いたりお勉強おそわったんです。『恩徳讃』ちゆんですか、あれだけは今でも身につけておぼえています。

こちらにきましてからもう55年。
土いろた経験まったくない百姓仕事。つらいなんのって言えるようなものではない。姑さん。その方を十五年も寝たきり看護してきました。つろうて悲しゅうて、何かに縋らんとどうにもならん時がありました。もちろんお寺さんにお参りすることも全然できぬまま、今日まで苦しみばかりのなかに暮らしてまいりました。

「昨年そのお姑さんを見送って、それからやとわたしの仏縁もかえってきたように思います。
七日七日の忌明けまでのご法座。むかわりそれから三年の法事と。その度ごとのお寺さんのご親切なご法話聞かせていただくのが、たのしみになりました。
『恩徳讃』。これだけ覚えてましたんや。これだけしか覚えていませんでしたけれど、この『恩徳讃』歌ってるうちに、長い辛い5年飛び越えて、子供のころの日曜学校のおだやかーな日にかえったような気持ちになっ てまいります。

自分ひとりがえらい目にあって、私一人が不幸のドンゾコにつきおとされてと、そんな55年だったとおもって暮らしてきたその間も、みほとけさまはわたしに寄り添って私と一緒にご苦労して下さったのだ、今日のご法話でしらすれたこととさせていただきます。
今日のご法話は、たのまれんでもねがわれんでも請われんでも、どうでもお前に寄り添って、こころの友として、苦しい海を乗り越えてお浄土までつれていこうと働いて下さる如来さまがわたしのナムアミダブツ。
ご院家さんといっしょに『恩徳讃』唄って、おばあちゃんの祥月命日をおつとめさせていただきます。

六月のこしよみ

- 一日 出石組念仏奉仕団(五月三十一日)
- 二日 テレホン法話更新
- 三日 クリーン作戦
- 四日 宮嶋幸男氏宅法事
- 五日 永井誠一氏宅法事
- 六日 兵庫教区布教使研修会(神戸)
- 七日 西方寺永代経
- 八日 西方寺永代経
- 九日 上夜久野専福寺永代経
- 十日 上夜久野専福寺永代経
- 十一日 出石組仏教婦人会総会
- 十二日 テレホン法話更新
- 十三日 教区同朋講座講師研修会(神戸)
- 十四日 たじま『喜愛』交流会(城崎)
- 十五日 たじま『喜愛』交流会
- 十六日 本覚寺永代経
- 十七日 本覚寺永代経
- 十八日 長専寺前任職法事
- 十九日 十六夜会定例法座
- 二十日 朗読ボランティアあすなる編集
- 二十一日 テレホン法話更新
- 二十二日 検診
- 二十三日 濱嘉子氏宅法事
- 二十四日 正福寺永代経
- 二十五日 正福寺永代経
- 二十六日 あすなる録音
- 二十七日 教区基幹運動推進委員会常任
- 二十八日 全国布教使大会(本山)
- 二十九日 全国布教使大会
- 三十日 「みのりを聞く会」法座
- 三十一日 玉井克弥氏宅祥月
- 三十二日 但馬社会福祉会総会
- 三十三日 納骨参拝研修旅行
- 三十四日 納骨参拝研修旅行
- 三十五日 納骨参拝研修旅行





親子一代・夫婦末代

寺の先月の「みのり会」のときに聞いていたのに、おのれの勝手な都合を構えて、その方のお見舞いに行けたのは、ようやく三日まえのことでありました。

病室にはいつまでも驚いたことは、「これが病人！」と一瞬目を疑うほどの昔どおりの髪飾(かくしやく)としたお姿。長年市会議員などの役職を勤め、お寺のためにも寺総代の長もなさった方でありました。ところがしばらくお話し聞いていますとお気の毒にさすがに話のつじつまがあちこち合わないのをごさいます。

たとえば、こうでございます。昨年、奥様をなくされて、お寂しいでしょう、ご不便でございましょうとお見舞い申し上げたのに対して、まあ、意外な意外なおこたえ。「わしは何も寂しいことはちっともない。あんた、知っていますかいなー」

親子一代・夫婦末代
ちゅうことを。

このことば通で、あれを死なしたと云うても、わたしら夫婦は、今も毎日語らうてる。手もとりのおうちでこれからはと連れ添うておるのですワ。ちっとも寂しいことあらへん。

親子はそういう具合にはいきまへんデー。役立たずになつたらなんぼ親でもポイ！ですもんナ

聞いてわたし大びっくり。やっぱり痴呆がここまで進んだんやと思うそのあとに、いやいや、一見痴呆とみえるこの方のおっしゃっていることが、むしろむしろ真実ではないのだからか。

六歳ちがいのそのお婆ちゃんを車椅子でお寺の仏婦の門法会にお参りして、熱心に二人でお聴聞なさっていたお姿にいつかであったことがありました。わたしもやがて痴呆になる。なるのならあんな痴呆になりたいなあーとしみじみ思ったことでした。

それからもう一つ感心させられたことがあります。付き添いのヘルパーさんから聞いた話です。

お見舞いに見えるお方のなかで一番出会って楽しそうなのは、一人の聾唖の方との語りだそうです。

どんなご関係の方なのでしょうネー。なにしろ聾唖の方ですから、せつかく出会われても言葉は全くありません。ことばは全くないのですが、不思議とお互い打ち解けて楽しんでに生き生きとなさっているのです。

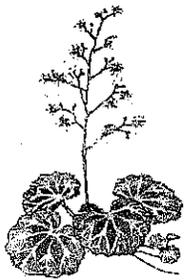
ヘルパーさんはいうのです。「ことばの無い世界でこそ、通じ合うということができるのかもしれないネー」

ほんとうの仏様って、「不可思議光如来」、ことばや思案を越えたところでお出会いできる仏様。

お浄土というのは、無量の光明の世界。有るとか無いとかそんな事実を越えた真実のひかりに包まれた世界。

あのおかたは、親鸞さまの教えのなかで、すでにそんな世界に生きていらっしゃるんだよキツト。

ご院家さまのおことばにうなづいたわたしでありました。



勝林寺 納骨研修旅行

ご案内

京都西本願寺と琴平温泉の旅

今年も、納骨研修旅行にみんなで参加しましょう。

旅行日程 : 平成14年6月29日(土曜)~30日(日曜)

行程 : 6月29日

勝林寺→京都・西本願寺に参拝

→西大谷本願で納骨、参拝

→琴平温泉で研修懇親

6月30日

金毘羅宮→善通寺→中万象園など観光

→勝林寺へ帰ります。

参加費 : 男性 33,000円

女性 30,000円

※ 本年度より、勝林寺経常費より補助をいただき、参加費が昨年よりお安くになっています。

毎日1度はお仏壇
月に1回お寺参り
年に1度の本山参り

降誕会云にやわもり

80の老人

わたしの寺では今年五月二十五日に宗祖親鸞さまの降誕会(ごうたんえ)がおつとまりになりました。

わたしがなぜ親鸞様を信仰しているかと云うと、もちろん親鸞様のはじられた浄土真宗の家に産まれたということによりますが、それよりも大事な中味があります。それは、親鸞さまと云う方は、人を「うまれ」や「生まれ方」によって絶対に差別されないと云うことです。

親鸞ご自身、自分の「生まれ」について誇ったり自慢したいことは一度もありませんでした。身分や血筋・家柄によって人の値打ちや運命が決定されてしまうような時代だったのに、親鸞という方は、人々や社会から爪弾きされ、人から悪人とののしられ、世間から「いし・かわら・つぶて」のごとくであるとお認められるような人々を、一番正面にすえて、その人たちと共に、如来さまをおよるこびになつたと聞いております。

ひるがえって今の時代。人権尊重の時代と云うのに、人の「うまれ」による差別がますます深刻になつていのではないかと思ひます。わたしの身辺にある差別を一つ挙げてみます。みんな考えてみてほしいと思ひます。

「知的障害者」育成の施設があります。その人たちは、その人たちの父母の懸命な支えの中で作業所に集まって社会参加の取り組みをしています。それで得たささやかなお金でもって、辛うじて仲間同士助け合い支え合つて生きているのです。

老人介護保険のよううな、社会全体や行政からの補助援助はあまりありません。それどころかこの施設は、地域からあまり歓迎はされず、何回もその場所を移転させられています。

おかあさんたちの切ない愛情と、所長さんはじめ補助員の2・3人の方の献身的な暖かい介護のなかで、社会参加に懸命に取り組んでいるのが現状です。